

# 弱さと傷つきやすさのエキュメニズム ラルシュ 共同体の思想と展開

著者	岡本 亮輔
著者別名	オカモト リョウスケ
雑誌名	宗教学・比較思想学論集
巻	12
ページ	79-91
発行年	2011-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/113154">http://hdl.handle.net/2241/113154</a>

# 弱さと傷つきやすさのエキュメニズム

## ーラルシュ共同体の思想と展開ー

岡本 亮輔

### 1 問題の所在

本稿では、現代社会における宗教性の再布置という問題意識を念頭に、ラルシュ共同体 (L'Arche) の事例について考察してみたい。まず、本稿において前提となる現代社会における宗教状況についての問題意識を簡単に述べておく。

ラルシュがはじまったフランスはカトリックを背景とする社会であるが、20世紀後半以降、いわゆる世俗化を経験する。統計的に言えば、教会出席率・聖職志願者数などに劇的な低下がみられ、特に前者は10%未満に低迷している。1960～70年代までの宗教社会学では、こうした状況は「宗教の衰退」として理解されてきたが、1980年代以降、いわゆる宗教復興論が論じられるようになる。アメリカではP・バーガーがそれまでの自分の世俗化論を撤回して「脱世俗化論」を主張し、フランスでは、政治学者G・ケペルが西欧一神教を事例としながら「神の復讐」を論じたのであった。

ここでは詳細には立ち入らないが、こうした宗教衰退論と宗教復興論の論争を受けて、「宗教変容論」の立場が導かれた。イギリスのJ・ベックフォード、フランスのD・エルヴェ＝レジェ、アメリカのM・マクガイアらが論じる立場で、現代宗教を衰退／復興という観点からではなく、宗教自体が様々な変容を経ながら社会全体における布置を転換させているという洞察に基づくものである。宗教変容論の特徴のひとつは、西欧キリスト教論において自明視されてきた〈教会と信仰の一致〉という前提を廃して、宗教的なものが形を変えながら様々な領域に浸透・拡散する過程を把握しようとするところにある。

以上のような宗教変容論とカトリック制度内の宗教性の再編成という問題意識を念頭に、本稿ではラルシュ共同体の運動について考察してみたい。後述するように、ラルシュは知的ハンディをもつ人々を「仲間」として受け入れ、彼らを中心にした共同生活を営む共同体である。欧米のキリスト教界をはじめ世界的知名度をもっており、1960年代にフランスで始まった活動は現在では世界数十ヶ国以上に広まっているが、創始者のジャン・パニエはカトリックの一般信徒であり、ラルシュは修道会ではない。

こうした特徴において、ラルシュ共同体は現代社会におけるカトリックの霊性とその変容を探る上で興味深い対象になる。以下では、ラルシュ共同体の形成史を概観し、次

に日本のラルシュである K 共同体についての調査報告を行う。その後、しばしば互いの類似性が指摘されるテゼ共同体やサンティアゴ巡礼の事例との比較検討も行いながら、ラルシュにおける弱さを通じたエキュメニズムについて考えてみたい。

## 2 ジャン・バニエとラルシュ共同体<sup>1</sup>

ラルシュ共同体の創始者ジャン・バニエは、1928年、スイスのジュネーブに生まれる。カナダ出身の父ジョルジュは第一次大戦を境に軍人としてのキャリアを積み始め、ジャンが生まれた時には国際連盟のカナダ代表団軍事顧問としてジュネーブに滞在していた。イギリスやフランスで少年期を過ごしたバニエであったが、第二次大戦勃発の13歳の時に、自ら進んでダートマスの海軍兵学校に入学する。戦争終了後もカナダ海軍に移って大尉となるが、この頃から人生の本当の意味、合理性や効率性に回収されない生き方を模索するようになったという。

結局、1950年にカナダ海軍を去り、パリの近くでトマ・フィリップ神父が主催していた学生共同体「活ける水 (L'Eau vive)」を訪れている。その後、パリ・カトリック学院で学びながら、アンジェのベルフォンテーヌ修道院やポルトガルの聖母出現地ファティマを訪れながら数年を過ごしている。ちなみに、父ジョルジュは1959年に第19代カナダ総督に任命されている。

1962年、バニエは「幸福—アリストテレス倫理学の原理と目的—」により、パリ・カトリック学院で哲学博士号を取得する。そして、翌年からはトロント大学聖マイケル・カレッジで道徳哲学を教え始めるが、秋頃、フランスのトロリー村で知的障害者施設「花咲き溪谷 (Val Fleuri)」の司祭になっていたトマ神父から促され同地を訪問し、学者としての道を歩み続けるかどうかを迷うようになったという。緊張と不安をもちながらも知的ハンディをもった人々との出会いに強い感銘と影響を受ける。

翌1964年にはトロント大学の職を辞してフランスに渡り、知的ハンディをもった人々がどのような境遇に置かれているのかを知るために、既存の精神病院や障害者施設を精力的に見学して回るようになる。そして夏頃、家族や友人の援助も得てトロリーに家を購入し、施設巡りの際に出会った最初の仲間であるラファエル・シミとフィリップ・スーと共同生活を始め、しばらくしてから3人の家には「方舟」を意味するラルシュの名がつけられる。

1965年にはバニエは「花咲き溪谷」の施設長に就任し、同施設がラルシュの2つめのホームとされる。1966～68年には3つめの「小枝 (Les Rameaux)」、4つめの「庵 (L'Ermitage)」が作られ、1969年にはカナダのトロント近郊に「夜明け (Daybreak)」が作られる。この後も、1970年にフランスのクービヤックの「慈しみ (La Merci)」、インドのバンガロールの「希望の家 (Asha Niketan)」など、世界各地にラルシュの共同体が作られてゆく。

インドにはラルシュの共同体は4つあるが、そこではキリスト教由来の「ラルシュ」という呼称は用いずに、サンスクリット語で「希望の家」を意味する「アシャニケタン」

の名で呼ばれている。アシャニケタンのメンバーはほとんどがムスリムやヒンドゥー教徒であり、それらの共同体の祈祷のための場では、それぞれの宗教の聖典が並べて置かれている。

トロリー村では、村内とその周辺の村に民家やアパートを借りうけている。ひとつのホームには8〜20人の障害者とアシスタントが「家族」として暮らしている。トロリーとその周辺では20軒ほどのホームに約400人が暮らしており、障害者とアシスタントの数はおよそ半々である。作業のできる障害者は、アシスタントと共に、毎日アトリエと呼ばれる仕事場に通う。作業はそれぞれのハンディと能力に合わせて割り振られる。たとえば織物や自動車部品のアトリエがあり、「障害者10人にアシスタント2人」といった割合で構成されている。重いハンディを抱える人だけのホームもあり、そこではアシスタントが24時間付き添っている。

また、パリでアパートを借りるなどして、障害者とアシスタントが共に暮らすホームもある。彼らはレストランや靴屋で働き、その給料と国からの補助金で暮らしている。アシスタントの多くは3ヶ月〜3年といった限られた期間をラルシュで生活し、近年では永続的にラルシュに関わるアシスタントは少なくなっている。

1971年の復活祭にはラルシュのメンバーでルルド巡礼が行われ、15ヶ国から4000人の知的障害者と8000人の家族・友人が参加している。さらに、この巡礼をきっかけに「信仰と光 (Foi et Lumière)」が作られる。信仰と光はラルシュとは異なり、共に居住するのではなく、ハンディをもつ人とその家族たちの定期的な集いである。1978年には、トロリーに「森の家 (La Forestière)」が作られ、より重い障害を抱えた人々を迎え入れ始める。1980年には、バニエはトロリーの共同体の責任者を退いており、1986年にカナダ勲章を授与されている。現在では40ヶ国以上に約130のラルシュのホーム、77ヶ国に約1500の信仰と光が存在している。

このようなラルシュ共同体の形成史は、宗教変容論の観点から考えると、第2バチカン公会議において修道生活と聖霊理解についての規定が事実上緩和されることで展開可能になった信徒団体・聖職者団体・在俗修道団体と軌を一にしていると言える。これらの集団はそれぞれが独特の霊的淵源を参照して固有の霊性を彫琢し、それを軸とした宗教生活の刷新を掲げる。その構成員の多くは在俗のまま活動を行っており、共同生活に参加する際にも誓願がないことがほとんどである。つまり、これらの集団は特に権威という側面から見れば、カトリックという制度宗教内に「内棲セクト」のような形で存在して独特の立場から運動を展開しており、こうした状況はカトリックの枠組の中での宗教性の再構築・再布置として読みかえることができるのである。

とりわけ共通する特徴として挙げられるのが「エキュメニズム(超教派主義)」である。これらの集団のほとんどにおいては、キリスト者の和解、宗教的寛容の促進、宗教的多元化の理解といった超教派的態度の涵養が重要な主題として掲げられる。ラルシュ共同体の場合で言えば、特にテゼ共同体との影響関係が興味深い。テゼ共同体はフランスのブルゴーニュ地方に本部を置くエキュメニカルな男子修道会であり、シンプルなフレーズを繰り返す歌と沈黙を軸にした独特の礼拝と若い巡礼者が多く集まることで知られて

いる<sup>2</sup>。

ヨーロッパ各地のラルシュ共同体や次節で紹介する日本のラルシュでの日々の生活にはテゼで行われる祈りが取り入れられている。特にヨーロッパのラルシュではアシスタントとして生活する人の多くが定期的にテゼを訪れて、リトリートの時をもっている。また、バングラデシュのラルシュ共同体は、そもそもは同地で貧者救援のために暮らしていたテゼの修道士たちの働きが基盤となって始まっているのである。そして、こうした第二次大戦後に展開したエキュメニズムを媒介とする新しい共同体の間の影響関係は、世俗化がもたらしたカトリックの制度宗教的統制の弱体化を背景にしていると理解できるだろう。

### 3 K 共同体の事例

ここでは、日本のホームのひとつである K 共同体をとり上げ、ラルシュ共同体における共同生活についてみてみたい。K 共同体は東海地方の中核都市 A 市に位置する。1978 年 12 月、2 年程の準備の後、他の施設の職員だった S 氏と H 氏が数人の障害者と共に S 氏の家で共同生活を始め、更生施設の実習所として誕生した。

始まった当初は主に廃品回収によって生計を立てていた。1986 年には別の市に第 2 のホームを作り、養鶏と農作業を始める。1987 年 4 月に、K 共同体はラルシュ共同体の生活寮のひとつとして認められ、1991 年に国際ラルシュに加盟し、1998 年、正式なメンバーとして承認されている。1993 年には 2 つめの生活寮を開所している。2001 年には社会福祉法人格を取得し、翌年には生活寮を福祉法人のグループホームとして登録している。

#### コミュニティのメンバー

現在、A 市を中心に 3 つのホームが存在している。ラルシュ共同体ではハンディを抱えたメンバーは「仲間」と呼ばれるが、一番大きいホームでは特にハンディが重い 1 人を含む 5 人の仲間と 2 人のアシスタントが暮らしている。残りの一つは団地の一部屋を借りており、仲間 2 人とアシスタントが暮らしている。もう一方は自分たちで建てた一軒屋で仲間 4 人とアシスタント 2 人が暮らしている。後二者のホームの仲間の内の 2 人は比較的ハンディが軽く、外に働きに出ている。それ以外の仲間は通所授産施設として認められた共同体の作業所で仕事をしており、ここには共同生活をしていない通いの仲間とアシスタントもいる。

K 共同体では、この他にもバニエの本を読んで感銘を受け訪れる人々や、教育実習生、神学生の研修としての滞在者なども受け入れている。これらの一時滞在者に配布される冊子では、コミュニティのメンバーは次のように定義されている。

このコミュニティは仲間の人を中心に、仕事のアシスタント、家庭のアシスタントに分かれています。二つのグループは別々の部門を受け持ち、互いに助け合いながらコミュニティを作ります。そして体験される方 [一時滞在者のこと] がおら

れます。

後述するように、ラルシュの共同生活では、知的ハンディキャップをもった仲間たちの共同体における中心性が繰り返し確認される。共同体は仲間を助けるために存在しているのではなく、互いに助け合いながらひとつの家を形成してゆくことが強調されるのである。K 共同体での一日の生活は以下の通りである。

平日	日曜
06:00 朝の祈り（個人的に）	朝食 自由
07:00 共同の祈り	教会へ（キリスト者、希望者）
07:10 朝食	昼食 各自
09:00 作業所で朝礼	散歩など
仕事	
12:00 昼食	
片づけ、休憩	
13:30 仕事	
16:30 帰宅	
18:30 夕食	
祈り	
21:00 消灯	

こうした日課の他にも、週ごとの各家庭での話し合い、アシスタント同士での分かち合いがあり、月に1回はコミュニティ全体での分かち合いが行われている。滞在者用の冊子では話し合い、分かち合いの目的は次のように説明される。

この家では、協力が良いことだとしても、ただ協力して働くだけでなく、さらに深くなるよう、互いに思い合い、信頼し友だちになることを目指します。そのために大事なことは自分を開くことです。ある意味で（心の防衛を外し）傷付けられることを引き受けることです。難しいことですが、それなくして、コミュニティは生まれませんし、真の友ともなれないことでしょう。[…中略…] 分かち合いでは議論、反論を避けます。それは、その人をありのまま知ろうと努めるためです。

このように、ラルシュ共同体では、コミュニティを合理的・効率的に運営することは第一の優先事項とはされない。仮に合理性・効率性がある程度犠牲になったとしても、仲間をはじめとするメンバーがより親密で人間的に深い関係性を築くことが目指されるのである。このような姿勢は、後述するような教師－生徒のような非対象の関係性が支配的な既存の施設ときわめて対照的だと言えるだろう。

## アシスタント

K 共同体のアシスタントになるためには以下のような手順を踏む。まず、アシスタントの希望者は2週間の体験滞在をした後、コミュニティと話し合い、それから3ヶ月間の実習に移る。その後、再びコミュニティと話し合った後、1年間のアシスタントとしての共同生活へと進む。冊子によれば、アシスタントにとって仕事や奉仕はやはり「第一の目的」とはされない。それよりも仲間たちと「共に生きる」ことが強調される。アシスタントの休みは日に3時間、週1日、月3日が原則として定められているが、実際には仲間たちと共に同じ家で生活しているわけであり、アシスタントとしての仕事の時間とそれ以外の時間が明確に区別されているわけではない。

アシスタントには、年に1度、「リニューアル」と呼ばれる振り返りのための8日間の休みが与えられる。その期間は共同体での生活を離れて、さらに1年間アシスタントを続けるかどうかを考え、その後、コミュニティと話し合う機会がもたれる。K 共同体の創設者S氏はインタビューで、このリニューアル後の話し合いにおいて、もしも「自分のため」ではなく、「コミュニティのため」にアシスタントを続けるというようなことを言った場合には、たいてい共同体を去ってもらう傾向にあると述べていた。

アシスタントは時として仲間を「指導」をしなければならないが、仲間を中心とするコミュニティによって常に助けられながら自分を見直す存在と位置づけられているのである。そのため冊子では、一時滞在者は仲間に「指導をしない」ことが強く注意喚起される。

## 仕事

仲間たちの生計は国からの障がい基礎年金に加えて、印刷の下請け、農業、石鹼の製造販売などによって立てられている。事業所自体は知的障害者の利用人数等に応じて行政から支給される給付費によって運営されている。仲間の仕事の分担は、毎朝アシスタントが割り振る。K 共同体では特に石鹼が主力商品で、国道沿いにある街中の作業所とは別に、山の中に石鹼工場をもっている。

しかし、責任者のN氏によれば、仕事は仲間たちの独立した生活を維持する上で重要ではあるが、もっとも大切なものではないという。滞在者用冊子でも「コミュニティーの中心は、知的ハンディを持った仲間の人たち」であり、施設にいた時は「ほとんど何も出来ず、まなごしもポーとしていて、ある意味で死んで」いた彼らと「つながり」を持つことがもっとも重要なこととされる。

仲間のほとんどは、そのハンディキャップのために、家族や両親からも切り離された生活を長く送ってきている。ラルシュ共同体以前にいた施設の多くでは、建前としては最終的に自立することが掲げられ、施設職員と教師-生徒という関係性の下に「訓練」を施される。だが実際には、自立して出所する人は皆無に近く、多くは際限なく訓練を受け続けることになってしまう。こうした既存の施設のあり方に対する批判から、ラルシュ共同体では仕事は第一の価値とはされず、「共にいること」自体が強調されるのである。

しかし同時に、コミュニティ内で仕事が最優先されないことと引き換えに、国際ラルシュへの加盟に際しては、財務面についても比較的厳しい審査が行われる。端的に言えば、仕事を最優先にしなくてもコミュニティを運営していける経済的・社会的基盤があるかどうかが吟味されるのである。各国のコミュニティには、日本で言えば社会福祉法人格のような当該の地域・社会における公的な補助や援助が受けられる資格を取得することが推奨される。

N氏によれば、公的支援の面において、ヨーロッパなどと比べると日本は十分な補助を得られていないということだった。特に、フランス、イギリス、カナダのコミュニティは各国の公的援助を得ることで安定した運営が行われているが、そうした福祉関係の整備が進んでいない国や地域では、寄付や国際ラルシュからの支援を頼みにせざるをえないのである。いずれにしても、このような背景から、あるホームがラルシュ共同体の正式な生活寮として国際ラルシュに承認されるまでには、10年近くに及ぶ4段階ほどに分けての審査が行われるのである。N氏によれば、正式加盟までの階梯は修道士を志す者が修練期を経て誓願を立てる過程に模されているのではないかとのことであった。

K共同体では創設から福祉法人格を取得前までは、仲間とアシスタントの生計は同一であった。すでに述べたように、最初期にはトラックで古紙を収集する廃品回収によって現金収入を得ており、その当時はS氏の家で仲間たちは暮らしていた。N氏は、こうした過去の状態に比べると、福祉法人になってからは運営は相対的に安定したが、アシスタントの給料は国からの給付金で賄われるようになり、その結果、仲間とアシスタントの利害が一致しなくなったことを語っていた。現在もひとつの家族として共同生活を送っているのだが、金銭的に見た場合、アシスタントは石鹸が売れても売れなくても事業所の職員として給料が支払われるようになったわけである。

## 祈り

ラルシュ共同体と同様、K共同体の創設にかかわったほとんどの人はカトリック信徒であったが、国際ラルシュへの加盟までは共同生活の中での祈りは行われていなかった。「共同の祈り」の時間がもたれるようになったのは、コミュニティの方向性に迷ってバニエの本で勉強を始めた時からであったという。

共同の祈りが始められた当初は、N氏は祈りが「強制」されるような雰囲気違和感を覚えることもあったが、現在は共同体にとってきわめて大事なものと考えているという。現在の礼拝は、おおよそ「テゼの歌（仲間が選ぶ）→ラルシュの絵本→テゼの歌→ラルシュの祈り→主の祈り」という流れで、テゼ共同体の歌を取り入れながら行われている。共同体における宗教や祈りについては滞在者用冊子では以下のように説明されている。

宗教について：世界中のラルシュは宗教を大事にしています。それは、能力がある意味で奪われている仲間は、とても辛いのですが、その分、人間の中心的なところに位置します。このことはとらえにくいことですが、共に生きれば、少しずつその



大切さが見えてきます。一見価値が見られない彼らの尊さは、ちょうど真の宗教が示すことと一致します。

祈り：この家では朝、夕祈りをします。この家の成長の過程からキリスト教（カトリック）で行われています。しかしプロテスタント・他宗教の人と共に生活することは、とても大切なことと思ひ、それを望んでいます。夕の祈りは、上に述べたように、弱い人を大切に、皆が同じ家族のメンバーであることを確認しあう一時なので、神を信じていない方も、どうぞ参加ください。

こうした日々の生活の中での祈りの他に、毎夏、他県の修道院などを使った3～4泊程度のラルシュの黙想会が企画されている。そのような機会にはラルシュ共同体やバニエに共鳴する人々が多く集まり、そうした人々は仲間たちの霊性に触れたがるのであるが、N氏によれば、黙想という祈りの様式自体が知的ハンディをもつ仲間にとぐわらないこともあってか、黙想会への仲間の参加はほとんどないという。

さて、K 共同体の来歴と共同生活について簡単にみてきたが、そこでもっとも重視されていたのは仲間たちとの互恵的關係性の構築である。ラルシュの共同生活で目指されるのは、一般社会では周縁化され不可視化されていた仲間たちを共同体の中心とし、彼らを一方的に扶助するのではなく、アシスタントたちも仲間にも助けられながら内省を深めてゆくことなのである。

ラルシュの共同生活においては、日々の祈りにおいてもテゼの礼拝形式を重点的に取り入れていることもあり、カトリックをはじめとする教派性が明示されることはほとんどない。実際、現在共同体で暮らすアシスタントでカトリック信徒であるのは一人だけである。また、仲間たちの家庭も必ずしもそうしたキリスト教的背景をもっているわけではなく、特に作業所に通っている仲間たちには伝統仏教から新宗教まで、家庭の宗教は様々である。ラルシュにおけるこうした超教派性は、知的ハンディをもつ仲間たちを中心に据えることで、教派的差異というある意味では主知的・神学的な区別が重要性をもたなくなったこととして理解できるように思われる。

#### 4 弱さと傷つきやすさの共同体

本節ではバニエの著作を概観しながらラルシュ共同体の霊性の特徴について考えてみたい。ラルシュ共同体に関わる人々の多くは、バニエの著作を通じてハンディをもつ人々との共同生活というあり方を知る。実際、バニエの著作は、トロントに作られたデイブレイクで生活したヘンリー・ナウエンの著作と共に、カトリック、プロテスタントを問わず、多くの人に読まれている。その意味で、たとえばテゼ共同体のように、共鳴する人々が必ずしも創始者であるブラザー・ロジェの著作を読んでいない場合と異なり、バニエの著作で語られることは、ラルシュ共同体の実際の共同生活に深い影響を与えていると考えられるのである。

前節で紹介したK共同体の生活にうかがえるように、バニエの思想においてもっとも強調されるのは、ラルシュが〈弱者を中心とする共同体〉であるという点である。弱者を「彼らのすべてがひとつの全き存在であり、他者から受け取るだけでなく他者に何かを与えることができる存在である」と捉え返し、通常の価値観を転倒させようとする。

知的ハンディをもった人は、理性と手仕事という点では限界がありますが、心やつながりという点では、ずっと恵まれています。知的ハンディ自体は、そのハンディ以上の純心さや、他者への信頼によって補われています<sup>3</sup>。

知的ハンディをもった人は、普通、理性による抽象化ができません。しかし、他者の存在を迎え入れる感覚には、たいへん恵まれています。彼らは競争ではなく『ひとつになる親しい交わり』を生きています<sup>4</sup>。

ここで強調されるのは「靈的賜物」としての知的ハンディである。通常は「能力の欠落」として否定的に捉えられるハンディが、むしろ他者へつながり、さらに他者の閉じられた心を開く力として評価される。しかし、こうした特殊な力は一般社会では認知されない。

バニエは既存の施設を「壁」として語る。従来の施設は「閉じ込める壁、出会いや会話を妨げる壁」であるという。この壁は弱者だけでなく、その家族も「あたかも共犯者として神から罰せられてでもいるかのように、内に閉じ込め」る。彼らは祈りにおいてすら、うるさいという理由から教会から遠ざけられ、ミサに出席することも叶わず、「感謝の祭儀のコミュニオン（聖体拝領）から外されてい」たのである<sup>5</sup>。

バニエにおいては、ハンディをもった仲間への対し方を基準に、信仰のもち方は大きく2つに区別される。一方には、「正統的で統合的な信仰に心を奪われ、伝統や儀式、宗教的アイデンティティ、しっかりした道徳を全力を挙げて守ろうとする人々」がいる<sup>6</sup>。いわゆる熱心な信徒と呼べるような人々である。

だがバニエにおいては、こうした人々は「自分の宗教を要塞のように考え」、「善良な者を内部に、悪者を外部に」位置づけ、自らの帰属する宗教の権威と価値観を絶対視している人々である。こうした人々に対置されるのが、「より開かれた、寛大な人たち」である。彼らは「…自分とは信仰が違う人たちとの触れ合い、コミュニケーションを大切に思い、一つの価値と現実的な光をその異なった人たちの中に見ようと」するのである。

このような対比は、宗教社会学で論じられてきた世俗化以前／以後の信仰者像の対比と重なる点でも興味深い。つまり、ミサへの出席、教導の遵守といった制度的規範に従順な信仰者像と、宗教的多元性を受け入れ、私事化の趨勢の中で自らの信仰を主体的に構築するような信仰者像の対比である。ただし、後者が前者よりも優れているとされるわけではない。バニエは後者に関して、こうした人々が「その開放性と傾聴が、徐々に信仰を崩していくことにもまたなりかね」ない点を指摘しており、きわめて現代的な宗教状況が念頭に置かれていることがうかがえる。

バニエが力説するのは「寛大」とは異なる「ひとつになる親しい交わり（コミュニオン）」である。寛大な人とは要するに権力をもった強者であり、「他者に自分に触れさせない」人で、「果たすべき役割があり、傷つけられない」人々である<sup>7</sup>。こうした点で、既存の施設にみられるハンディのある仲間を教育すべき生徒とみなすことが批判される。また、ひとつになる親しい交わりは「協力」とも異なるという。同じ目的のために行動を共にするのは軍隊や企業にも見出せることであり、それは「一緒にいること」それ自体に喜びを見出すことではないのである。

このようにバニエにおいては、寛大、教育、協力といった他者との結び方は、ハンディのある仲間を弱者とし、それを能力のある強者が一方的に支えるという非対称的な関係性として批判される。逆に、バニエが説くコミュニオンは「相手に触れられるまになり、傷つけられやすくなり」、そうした弱さを受け入れあった上で「見つめ合い、触れ合うことによって行われ」という。そして、ラルシュ共同体はこうした弱さと傷つきやすさを軸にした集まりとされる。「…他者に開かれ、傷つきやすさと謙虚さを失わない限り〔…中略…〕コミュニティーは真にコミュニティーとなる」のであり、「コミュニティーが深まれば深まるほど、メンバーは、弱くまた傷つきやすくなる」のである<sup>8</sup>。

ラルシュ共同体のアシスタントであった P・ファヴァロは、ラルシュで中心にあるのは、他者の苦痛と苦しみへの応答と信頼関係であるとする。誰かを信頼すればするほど所属と交流（communion）の感覚の中で成長するとし、その過程で宗教・文化的な差異が解消されたことを指摘している<sup>9</sup>。日本の K 共同体に限らず、ラルシュの創設に関わった人の多くはカトリックの背景をもっていたが、それ以降は実に様々な宗教や国籍の人々が参加するようになっている。

特にインドやカナダで展開してゆくにつれ、宗教的・文化的な違いを越えて、共通の人間性を見出すようになったという。その過程において、ハンディをもった仲間は、宗教的・文化的境界とは人工的なものにすぎないことを示してくれたという。そして、知的ハンディのある仲間が他者を受け入れるような仕方で他者を受け入れられるようになることで、その人に対して開かれ傷つけられやすくなった仕方で本物のコミュニオンを結ぶるというのである。

このようにラルシュ共同体においては、ハンディのある仲間の中心性と彼らを軸にした共同性の構築が繰り返し強調される。ラルシュ共同体では、アシスタントは仲間を助けたり手伝ったりするために駆け付けるのではなく、彼らの靈性に惹かれてやって来て留まる。そして仲間にとっては、それまでの孤立していた人生とは対照的に、他者との真のつながり方の雛型として利用されることが自己実現・自己表現の機会になるという語りがなされる。その意味で、ラルシュ共同体は仲間たちを「弱さ」と「傷つきやすさ」を軸にした靈性を引き出す宗教的資源として再発見したと考えられるだろう。

興味深いことに、こうした弱さや傷つきやすさを軸にしたつながりの生成という主題は、テゼ共同体の巡礼やサンティアゴ巡礼においても語られる。メノナイト派の神学者 A・P・ボアーズは、サンティアゴ巡礼記において、自分が巡礼中に深刻な怪我をした時に、見知らぬ女性が当初は躊躇しながらも、最終的には遠く離れた病院まで同行して診

療にも立ち会ったエピソードについて述べ、サンティアゴ巡礼にはカトリック信仰に回収されない「固有のエートス」が存在し、それを「信頼」と「協働」であるとしている<sup>10</sup>。そして、サンティアゴ巡礼と同じような他者との関係性のあり方、つまりボランティアとしか言いようのない形での他者への関わり方を通じて育まれる「連帯」がテゼ共同体やラルシュ共同体と類似していると指摘するのである。

テゼ共同体やサンティアゴ巡礼に関わる人々の共通点として、教派的アイデンティティや制度的・組織的な宗教性に対する忌避や無関心が挙げられる。特に西欧社会においては世俗化・私事化の過程を経ることで、教派ごとの儀礼や教義の違いが重要なこととは認識されなくなった<sup>11</sup>。西欧の多くの社会では、カトリック／プロテスタントの差異はそれほど問題ではなくなり、スイスのような二宗派主義の国でも、大半は自分の親の宗教に「習慣づけられている」といった理由でその教派に属しているに過ぎなくなっている。

こうした現象の背景にあるのは、積極的な宗教間対話や他教派に対する寛容ではなく、社会全体の宗教への無関心である。要するに、ポアーズが言う「名ばかりのキリスト教徒とすら自己認識しない」人々が増加することで、意図せずにエキュメニカルな環境が整えられてしまうのである。

たしかにラルシュ共同体やバニエに共鳴する人々の中には、伝統的な宗教のあり方に対する知識や関心が強くない人も少なくない。その意味で、テゼ共同体やサンティアゴ巡礼と同様のエキュメニズムの契機も見出せると言える。

だが一方で、ラルシュ共同体のエキュメニズムには異なるニュアンスが含まれているのではないだろうか。ラルシュにおいては、宗教的な無関心や知識不足ではなく、仲間たちの知的ハンディという弱さと、彼らと関係を結ぶ際の傷つきやすさが、教派性を超えたより大きな次元を示唆しているように思われる。端的に言えば、教派という知的な構築物の意味を理解しない仲間たちを軸とする共同生活を通じて、教派がもつ人工性・恣意性が曝露されるのである。世俗化・私事化の意図せざる帰結としてのエキュメニズムではなく、仲間たちの知的ハンディを奇貨として、より普遍的な人間性という観点から宗教的・文化的差異が決して本質的な問題ではないことが明かされているのである。

## 5 小結

社会学者の中島道男は、Z・バウマンに依拠しながら現代社会で求められる道徳的人間像を「弱さ」と「傷つきやすさ」で特徴づけている。中島は、不確実性・流動性をもった現代において他者との紐帯を結びうる個人像として「弱い人間」像を提唱し、近代主義の理想的個人像である「強い人間」に対置する。「強い人間」は「いったん原理さえ手に入ればあとはそこから逸れていないかどうかをチェックしてさえいればいい」というロビンソン・クルーソー的な個人モデルである<sup>12</sup>。

これに対して「弱い人間」は「自らが十分道徳的であるかどうかについて絶えず自問する存在」である。「弱い人間」の特徴は、継続的に道徳的自省を行うため、常に他者と

の交わりへと開かれている点にある。弱い人間は「…いまだ道徳的でないのではないかと絶えず自己懷疑」しながら他者と接するため、他者を「支配」することはない。

中島は、ボランティア論やケア論を参照しながら、より一般的な文脈の中で「弱い人間」像を敷衍している。金子郁容のボランティア論を参照した部分では、ボランティアの「バルネラビリティ (脆弱性・傷つきやすさ)」が注目される。金子においては、ボランティアは他者の問題を「自分から切り離さず」に、それを自分の困難として引き受けるために、自らを〈傷つきやすい存在〉にするとされる。

中島はバルネラビリティ概念に同意しつつも、それをさらに拡張する。金子の議論ではバルネラビリティが生じるのはボランティアが問題に「関わったそのあとの状況」なのであるが、中島は、ボランティア (自発的) という言葉とは裏腹に、そもそもボランティアとして他者の問題に「関わることそれ自体が根本的な受動性によるもの」だとする。つまり、ボランティアは「真の能動性の基礎にあるパトス性 (受動性・受苦性)」に促されて、否応なしに他者との関係性に関わってしまうことを論じるのである。

中島がボランティアの始原として論じる受苦性・受動性は、バニエが語りラルシュの日々の共同生活の中で目指される仲間たちのとのつながりと極めて近いものだろう。仲間たちは知的ハンディをもつがゆえに、自明視されている宗教-社会的な通念を超えることができる。本稿ではそうしてもたらされる宗教性をエキュメニズムとして理解しつつも、一方で他の世俗化社会に顕著なそれとは異なるニュアンスを孕んだものとして特徴づけてみた。ラルシュ共同体は一見は確固とした宗教性を示さないわけであるが、それは仲間たちの弱さを中心にすることで相互作用それ自体を前景化し、そこで独特の宗教性が織り成されると考えられるのではないだろうか。

【註】

- <sup>1</sup> バニエとラルシュ共同体については、バニエ自身の著作に加え、浅野幸治「ジャン・バニエ略伝」（上・下）（『福音と世界』61(5-6)、2006年）を参照した。
- <sup>2</sup> テゼ共同体については、拙論「聖地の零度—フランス・テゼ共同体の事例を中心に—」（『宗教と社会』第15号、「宗教と社会」学会、2009年）を参照。
- <sup>3</sup> J・バニエ『あなたは輝いている—ラルシュ・コミュニティーからの思索—』佐藤仁彦訳、一麦出版社、2008年(=J. Vanier, *Toute personne est une histoire sacrée*, Paris: Plon, 1994)、pp.6-7。
- <sup>4</sup> 同書、p.9
- <sup>5</sup> 同書、pp.25-6
- <sup>6</sup> 同書、p.39
- <sup>7</sup> 同書、p.57
- <sup>8</sup> 同書、p.52 および p.94
- <sup>9</sup> P. Favaro “Spirituality and People with Disabilities.” in M. Nash and B. Stewart(eds.), *Spirituality and Social Care: Contributing to Personal and Community Well-being*, London: Jessica Kingsley, 2004.
- <sup>10</sup> A.P. Boers, *The Way is Made by Walking: A Pilgrimage Along the Camino de Santiago*, Downers Grove: InterVarsity, 2007, pp.104-6.
- <sup>11</sup> R.J. Campiche “Dilution ou recomposition confessionnelles en Suisse,” Davie, G et D. Hervieu-Léger eds., *Identités Religieuses en Europe*, Paris: La Découverte, 1996.
- <sup>12</sup> 中島道男『バウマン社会理論の射程—ポストモダニティと倫理—』青弓社、2009年。

（おかもと・りょうすけ 日本学術振興会特別研究員 PD）